

副詞「たいがい」の歴史の変遷

李 知 殷

一 はじめに

現代日本語における「たいがい」はさまざまな学者や文法書などに「事態や行為が行われる確率が高いことを推量する副詞」として扱われている。また工藤（一九八二・五三）は「たいがい」とともに「推測」を表す副詞に分類しており、（二）のように大正のものを取り上げ、推量表現と共起関係にあることを述べている。

（一）例の（考えておこい）だから、大概いいたろうと思う。

志賀直哉『暗夜行路』（工藤 一九八二より）⁽¹⁾

一方、『大漢和辞典』（一九五六・三七七）の「たいがい」に「あらし。ひととほり。大槩（2）に同じ。」という説明があり、（二）のよりに連用修飾のものを挙げている。

（二）大概於唐人詩誦之尤習

『全唐詞話』（序）

これを見ると、「たいがい」は中国から日本に受容される際、「あらし。ひととほり」という名詞としての意味用法が時代とともに変化して、現代語のように「事態や行為が行われる可能性があることを推量する」という意をもつようになったことが推測される。

また『日本国語大辞典』第二版（二〇〇一・五九八、以下『日国』と称する）による「たいがい」の最も古い挙例は平安時代の『小右記』（二〇一六年頃）のものである。

（三）天旨難背。仍聊廻愚慮、大概洩奏耳。⁽³⁾

『小右記』長和四・七・七（二〇一六年頃）

この「たいがい」は「ある物事の大筋となる部分、だいたいのあ

らまし」という意味をもち、名詞として用いられる。中国語そのままの意味用法を承けているようである。そこで、本稿は「たいがい」がどのような変遷を経て、現代語のように陳述性をもつようになったか、その歴史的過程を考察することにする。

なお、主なテキストは『新編日本古典文学全集』（小学館）（以下『新全集』と称する）、『日本古典文学大系』（岩波書店）（以下『大系』と称する）や辞典類を用いることにした。場合によって、『新日本古典文学大系』（岩波書店）（以下『新大系』と称する）、『新大系』（以下『新』と称する）も用いる。

また、代表的な表記は「たいがい」とし、漢字表記においては旧・新字体を併用する。

二 中古・中世

平安時代に名詞として既に用いられていることは前述しが、『大鏡』にも似たような例が見える。

(四) 今日之事大概如此人々装束盡レ

『大鏡』「裏書」(大系・四一三頁・平安後期頃)

このほか、『色葉字類抄』に「大概 タイカイ 云大宗也」という記述が見えるが、漢文訓読調で用いられる性格のものであったと

見られる。ただし、中世後期になると用例が少し増えるようになり、そこに新しい用法が見られるようになる。次に、中世の資料に見られる「たいがい」を形態別に「たいがい + a」類と「たいがい ϕ 」類に分けて考察することにする。

二・一 「たいがい + a」類

【助詞などが付く名詞的用法】

(五) およそ、かくのごとく、近年の見聞を安得して、大概を書

する所、応永年内の作能の数々、末代にもさのみ甲乙あらしと覚えたり。『三道』(新全集・三七〇頁・一四〇〇年頃)

(六) 是事ガアルホドニ、其事ノ起ヲ一々ニ大概ヲ載タズ

『史記抄』三(一四七七年頃)

(七) 酒モヨイ悪ハアレドモ、大ガイハ回者ナリ。

『玉塵』一(一五六三年頃)

(五) (六) は「を」をとり、(七) は「は」をとっている。これらは「たいがい + a」類として、「大部分。だいたいのあらまし」の意で用いられている。(五) (六) の「たいがい」のヲ格は「書する所」、動詞「載せる」にかかっている。(七) は「Aども、たいがいはB」という文型で、ドモ節の事柄を認めながら、Bの内容を強調する。(五) は、近年に見聞きして得られたことを大まかに書き

記したものの、(七)は酒にも良し悪しがあるけど、物事の大筋となる部分はだいたい同じであるというように解釈される。そして、次の(八)のように「たいがい」に断定の「ナリ」が付いて述語的に用いられるものが見える。これは「能の構成の概要である」という意である。

(八) また、出物の舞楽の人体によりて、切拍子などにて入る事もあるべし。いづれもいづれも、長くては悪かるべし。長短の事、音曲の句数を以て計らふべし。これ、序風の能姿、大概なり。『三道』(新全集・三五八頁・一四〇〇年頃)

【形容動詞的用法】

『時代別国語大辞典』「室町時代編」(三)(一九八五〜二〇〇一・九二七)の「たいがい」の項に、形容動詞として「細部への配慮を欠いた大まかな対処で、事が済まされるさまを表す」と記されており、程度性が含まれている。抄物類では「たいがいに」形で連用修飾の用法が見られる⁽⁴⁾。これは近世に至って相手の行動などに対していい加減にしてやめさせようとする意として「たいがいにして」形につながっていく。

(九) 今ハ簡要ニセウズ、提綱ヲバ大概ニシテ、謝語ナンドヲ結構スルゾ 『勅規桃源抄』四(一四七七年頃)

(一〇) 大概二見夕事リ 『毛詩抄』三(一五三九年頃)

二・二 「たいがいゆ」類

単独で用いられて副詞的に機能する用法が見える。『日国』には『兵範記』(一一五三年)の「奉仕御装束、大概見_三于指図_一」が最も古い例として挙げられているが、漢字仮名交じり文でも(一一)のように鎌倉時代には用いられるようになっていた。

(一一) 重障除ル事ヲノツカラ知レタリ。是レ古人ノ譬ニキカズトイヘドモ、私シニ思ヒヨリ侍リ。念佛・眞言ハ大概風情アヒワタリ、義門互ニ相資シテ、信ヲマスベシ。

『沙石集』(大系・一二三頁・一二八三年頃)

(一二) およそ、若年よりこのかた、見聞き及ぶ所の稽古の条々、大概注し置く所なり。

『風姿花伝』(新全集・二一〇頁・一四〇〇年頃)

(一三) さきざき、大概見渡して、その里の辺に松あり、その所には河ありと心あてをしてとほるべし。

『連歌比況集』(新全集・一七二頁・一五〇九年頃)

いずれも意味の面では「あらまし、ひととおり」という意味をそのまま受けついで、たとえば(一二)は「若い頃から見て聞いた稽

古のあり方を大まかに書き記す」ということ、(一二三)は連歌などをみる時、どのような心持ちがいいかという質問に対しての答えの一部で、まずは「(全体的に) だいたい見渡して」ということを表す。このように「細かいことは気にせず、全部ではないが、ほとんど、だいたい」というような意味を表す。構文的にみると、主に節や断定文に用いられている。(一一)(一二三)はテ節や句、(一二)は断定文にかかっている。

以上、名詞性が強く見られる原義を保ちつつも、形容動詞や副詞の用法を生じさせ、多様化してきた様相がうかがわれる。

三 近世

近世初期の『邦訳・日葡辞書』(一九八〇：六〇四)では「Voyosono coio (およそのこと) 大部分、あるいは、おおよそ」と記され、名詞的なものを代表として挙げている。しかし、このような「たいがい」の名詞としての用法は、調査した範囲では多くはなかった。

そこで、近世における「たいがい」の使用状況について、同じく「たいがい+a」類、「たいがいφ」類に分けて見ていくことにする。

三・一 「たいがい+a」類

まず、名詞的用法としては依然として「を」格をとるものがある一方、「の」を伴う連体用法が初めて見られるようになる。そこから指示詞とともに用いられるものも現れる。これは前文で述べた内容を受けて、その概略的なことを表す用法である。

【助詞などが付く名詞的用法】

(一四) 大概を論ずるときは、まづ万葉などはありのままにて、実情と云ふべし。

『排蘆小船』(新全集・三三七頁・江戸中期頃)

【たいがいの名詞／名詞のたいがい】

(一五) 其ウへ衣類食物ハ、望ノ通ニイタサセ、遊興物參等、心任ニ致コトナレバ、大概ノ孝行ハ致シ候。

『都鄙問答』(大系・三八四頁・江戸中期頃)

(一六) 古今ヲ合セタルガ趣向也。丁ド詠歌ノ大概ニ同ジ。

『槐記(抄)』(大系・四七五頁・江戸時代)

【その+たいがい】

(一七) その歌いかに秀逸といへども、取るに足らざるなり。されば先達もこれを重く教へたまひて、その書又多し。されどもその大概は、書きも記すべけれども、精しきことは書き記しがたし。(中略)今の世、「てには」伝授と云ふこともあれども、これもその大概にて、なかなか「てには」伝授をしたればとて、悉く「てには」の悟らるる

物にもあらず。

『排蘆小船』（新全集・三四四頁・江戸中期頃）

「の」などに付いて「一般的なさま、ありふれているさま」の意で用いられている。

次は、形容動詞の用法である。依然として「たいがい」形で事

【たいがいな】

柄や事態をある程度で済ませるさまを表す。すでに中世後期に用い

(二〇) それはく／＼きつい弱りいの・大概な事なら、もう了簡してやらんせ。

がいにする／＼して」形として「いい加減にする／＼して」という意を表すようになり、さらに、明治にまで固定的な表現として使用され

『妹背山婦女庭訓』卷四（新全集・四三二頁・一七七一年頃）

続ける。

(二一) (梅・きよ) 梅「ア、もし、お清どん／＼。どふぞおま

【たいがいに】

(一八) (茶や男・女房) ○台所には男どもが茶や男「おかみさ

へ往ておくれなら御如才もあるめへが、此間の通りにして、そして帰りに親父はしの和田で大概なのを沢山と焼

ま。あれは何か、おかしなもので御座りますぞへ。大がいにあいさつをして、おかへし被成ませぬか」

出屋の方へは玉子蒸の中へぎんなんを多分入れてと左様いつておくれ。

『遊子方言』（新全集・四四頁・一七七〇年頃）

『風月花情 春告鳥』三編 卷之八（新全集・四八八頁・一八三六年頃）

(一九) 或人曰。「小見世の女郎は初会なぞに、『わつちや子どもの時は丁子やに居やした』の『扇屋にゐた』のと、とはずがたりをするものなり。これは小みせに居るをはぢてのまけをしみなり。たいがいに聞ひてをくべし」と云々。

『傾城買四十八手』（新全集・一一五頁・一七九〇年頃）

また、連体形「たいがいな」形も見られ、主に形式名詞「こと」

副詞的用法として、それまでの意味とは違った、新しい意味が近世前期の資料に見られるようになる。話し手によって、ある事柄や事態が起きる可能性を推量するというような意で用いられるように

三・二 「たいがいΦ」類

なる。

まず前代からの「細かいことは気にせず、全部ではないが、ほとんど、だいたい」などの意味を表すものから見ていく。

(二二) それは先づ珍重権三殿は御存知ないか。されば存じたとも申されず存ぜぬとも申されぬ。惣じて是は茶の湯の極意。家の傳多けれども師匠市之進一流は。東山殿よりの傳。一子相傳の大事なれば。権三體が茶の湯で傳授許し受けう筈もござらねども。師匠の咄聞きはつった儀も有り。大概非の入らぬ程の御用の間には合せませうと。

『鑑の權三重帷子』上之卷（大系・二六〇頁・一七一九年頃）

(二三) 夫も夫には極らぬ。女夫子も有、又顔の似ぬ子も有。マア大概顔が似れば心もよふ似て。

『菅原伝授手習鑑』（大系・一〇五頁・一七四六年頃）

(二四) (聖吉・けん蔵・徳太郎) [聖吉]「コレくゆふべの玉章を見せてへ。おれにどうもわからねへ事がある（中略）ソレ爰よ。をとゆふは御やくそくのこがねいつひらサ。これはソレ読本の文句にあるから大概覚えてゐる」

『柳髮新話 浮世床』初編 卷之中（新全集・二七五頁・一八一三年頃）

いずれも「すべてまではいかないものの、ほとんど」という意である。意味的には前代と異ならないが、(二二)は「師匠の話を聞きかじったこともあり、だいたい非難を受けぬ程度のご要はまにあわせられましよう⁽⁵⁾」というように解釈され、この「だいたい」は「非難を受けない」という程度であることを修飾する例となっていて、事態や事柄に対して話し手の気持ちが含まれるようになったと見られる。そして、近世後期には否定文のなかで用いられるようになる。

(二五) 凡日本の水の最上ハ、玉水かと存ます。私も大概呑で見ぬ水もござりませぬが、糺や醒が井ハ水くさし。

『鳩窪雑話』第十二卷 一（噺・三一八頁・一七九一年頃）

(二六) 文詞は昔も今も只義理の達らんのみを要とす。大概歌詞にかはることなし。古今集の序、土左日記などいづこか聞えざる事ある。

『歌学提要』（大系・一六四頁・一八四三年頃）

工藤（一九八二・五二）は、述語が文の叙法（ここでいういわゆる「陳述」）を決定する中核であり、それに関わる副詞は述語の叙法性を明確化するとしている。ただし、この時点では、まだ「たいがい」と文末表現が直接に関わって関係するものは見当たらないが、何らかの繋がりが生じはじめた段階であるように考えられる。

三・三 陳述性の発生

近世後期になると、次のように文末に推量表現をもつ文に用いられた例が見える。

○「そうだ」形

(二七) 主人から頂いた定紋付を胴着にして着て黙ッ臭い身に付て、猪や猿を打に出る。そしてマア、籠相かしい定九郎が足を拿てからびつくりすることがどこにあるものか。猪だか人だか大概しれさうなものだ。獵人が火繩を消やうなことどうして渡世がならうぞい。

『浮世風呂』二編 卷之下 (大系・一五三頁・一八〇九
〜一八一三年頃)

○「う」形

(二八) (西心・白蓮・奎助) (西心)「サア、追暖かになつて來る故、善光寺へ參詣せうと、それ故今晚お礼やら、お暇乞に上つたのじゃ。」(白蓮)「何、善光寺へ行かつしやる。そりゃアい、こつたが、然しあちらは名代の雪。三月にさつしやればいゝに。」(西心)「イヤ、もふ大概雪も片附ましたらふ。」(奎助)「どふして、わしらが國の雪といふものは、五月でなくちゃア解はしねへ。今の様に泪をこ

ぼしたり、水鼻を垂らしたりすると、直に氷柱にぶら下る。」

『小袖曾我薊色縫』(大系・三八三頁・一八五九年頃)

いずれも「実際に確かなことは分からないまま、推量するさま」を意味するものである。(二七)は、「猪か人かはたいといわかりそうなものだ」の意、(二八)は「雪が溶けたかどうかわからないが、たぶん雪は溶けただろう」の意である。これらは現代語に近い用法であり、推量の陳述副詞として用いられたものと認められる。このような陳述副詞の用法は、『日国』の最も古い挙例は『武蔵野』(一八八七⁶)であるが、近世後期に遡ることができる。

四 明治以降

「雑誌『太陽』のコーパス」を用いて、一八九五年・一九〇一年・一九〇九年・一九一七年・一九二五年を対象に「たいがい」(「大概」等を含む)を検索したところ、二二三例が得られた。文語は七五例、口語は一四八例で、口語は文語の例数より二倍程上回っていた。口語を中心に形態別に分けてみると、「たいがい+α」類は五三例、「たいがい+φ」類は九一例であり、現代語的表現(述語の省略など)は四例であった。そして、副詞的用法に比べて、名詞的用法や形容動詞的用法の使用が減少していることが分かる。⁷⁾

では、明治以降の「たいがい」を用法別に見ていく。まず、「たいがい+a」類に属する、助詞などがついて連体修飾、連用修飾するものがある。

(二九) 之を要するに、大概の博物館では、そんなに保存法も考へないし、

神保小虎「僕の嫌ひなハコブツ館」『太陽』九号一九一七年

形容動詞の用法は一〇例中、五例が程度性を表すものであり、(三)のように「たいがいに」形は前代から見える「ある程度ですませる」という意で用いられている。

(三〇) 『俺は大概な種類は食つて見たな、勿論料理してだが。』

三上於菟吉「長篇小説 蛇人(第六回)」『太陽』七号一九二五年

(三一) あんまり深入りすると、他人にも迷惑をかけるので大概にする。

古島一雄「役人となつての感想」『太陽』九号一九二五年

そして、講演の内容を収録したものには、「たいがいね」(手島精一「工業教育」『太陽』二号一八九五年)というような口語用法も見られた。

副詞的用法とされる「たいがいゆ」類はさまざまな文末表現との

結びつきが見られる。近世後期には少数であるが推量形と共起するようになったことは前節で述べたが、明治に入ると、断定形(三九例)との共起が多く見える一方、推量形のうち「だろう」形(五例)、「う／よう」形(二例) などとの共起関係も認められる。時代とともに推量形との共起関係を徐々に強めていき、推量の陳述副詞になつていったと考えられる。

次の〈表一〉は「たいがい」と文末表現との共起関係を示したものである。

〈表一〉「たいがい」の共起形式(例)

※「たいがいゆ」類のうち、副詞として文末表現と共起関係をもつものを対象とした。
※本稿で陳述副詞とする範囲は、「断定・推量『だろう、らしい、かも知れない、にちがいない、まい』形・意志『う／よう』形・疑問『だらうか』形」である(8)。
※「その他」(四三例)は「述語の省略、節や句を修飾するもの、否定形(七例)、解説不可等」を含む。

合計	一	七	一五	一七	八	四八
断定形	一	五	一二	一五	六	三九
意志形	・	一	一	・	・	二
推量形	・	一	二	二	二	七
	一八九五	一九〇一	一九〇九	一九一七	一九二五	合計

では、「たいがい」と共起関係が見られる用例を見てみる。

○断定形

(三二) 充分に分からぬところもあるけれども大概分かった。

遠藤吉三郎『自然界の三大矛盾』に就て『太陽』二

号一九〇九年

○「だろ」形

(三三) 『(前略)クラシックつて何と云ふ意味なの?』 『大概

古いつて事だらう。』 『(小話)『太陽』四号一九二五年

(三四) 風さへあれば、これだけの放火で、大概、灰になるだら

うよ。六十人もあれば好いんだ。

山中峯太郎『支那革命秘史 乱華』(第二回)『太陽』一

号一九二五年

○「う／＼よう」形

(三五) 『でも、それは如何しても申されません、と、まで申し

たら大概御察しになりませうが……』

見水蔭『海賊村』『太陽』三号一九〇九年

意志形の「う」はここでは推量の意である。前の表では用例が少なく見えるため、少し明治期の小説から推量表現と共に起する例を挙げておく。

(三六) 「どうも相済まん、僕は全然遊んでいて。寄附金は大概

集まったろうか」

国木田独歩(一九〇二)『酒中日記』二六四頁

(三七) 『(前略)あんな面倒臭い事をするよりせめて木札でも懸

けたらよさそうなんですがねえ。ほんとうにどこまで

も気の知れない人ですよ」 「どうも驚きますな。しかし

崩れた黒塀のうちと聞いたたら大概分かるでしょう」 「え

えあんな汚いうちは町内に一軒しかないから、すぐ分か

りますよ。」

夏目漱石(一九〇五)『吾輩は猫である』二九四頁

(三八) この旗さえ見たらこの群集の意味も大概分るだらうと思っ

て一番近いのを注意して読むと木村六之君のを凱善を祝

す連雀町有志者とあった。

夏目漱石(一九〇六)『趣味の遺伝』三一七頁

なお、(表一)には示さなかったが、近世にも否定文のなかで用いられたが、明治にも次のようなものが見られる。(三九)は否定形と共に起し、事柄を否定する用法である。

○否定形

(三九) 我國には外國に做つて種々の團體が出来て来たが、是等

の組織は大概完全と云ふことが出来ない。

内藤久寛『商業會議所改造の急務』『太陽』五号一九二五年

工藤（一九八二）の指摘の通り、「たいがい」は陳述性を見せかけている過程にあるのかもしれない。ただし、用例は少ないながら、文末の推量表現との共起する関係にあるのは間違いない。したがって、陳述副詞の一種として認めるべきものであると考えられる。

五 おわりに

中古から明治以降にわたって「たいがい」の意味用法について検討した。「たいがい」は中古では名詞的な性質が強く見え、その後、中世になると、助詞などがつく名詞的用法のほかに、形容動詞的用法、副詞的用法が生じた。形容動詞的用法には程度性が含まれる用例があり、近代にまで引き継がれる。近世では、主に副詞的用法として多用され、特に、後期になると推量表現と共起関係をもつようになる。そして、明治に入ると、推量の陳述副詞としての性格を徐々に強めていくことになった。

参考文献

- 工藤 浩（一九八二）「叙法副詞の意味と機能―その記述方法をもとめて―」『国立国語研究所 研究報告終』（3）秀英出版
- 小林幸江（一九八〇）「推量の表現およびそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』東京外国語大学、pp.3-22
- 〈辞書類〉
- グループ・ジャマシイ編（一九九八）『教師と学習者のための日本

語文型辞典』くろしお出版

小学館国語辞典編集部編集（二〇〇二）『日本国語大辞典』第二版 小学館

上代語辞典編集委員会編（一九六七）『時代別国語大辞典』「上代編」三省堂

土井忠生 他（一九八〇）『邦訳：日葡辞書』岩波書店

室町時代語辞典編集委員会編（一九八五―二〇〇一）『時代別国語

大辞典』「室町時代編」三省堂

諸橋轍次（一九五六・一九九九）『大漢和辞典』大修館書店

〈テキスト〉

『新編日本古典文学全集』（小学館）（[Japan Knowledge Lib.オンラインデータベース]併用）、『日本古典文学大系』（新日本古典文学大系）（以上、岩波書店）、『榭本大系』（東京党出版）（国文学研究資料電子資料館のデータベース併用）（CD-ROM版）太陽コーパス 雑誌『太陽』データベース（国立国語研究所）、（CD-ROM版）新潮文庫 明治の文豪』（CD-ROM版）新潮文庫 大正の文豪』（新潮社）

注

- (1) 工藤（一九八二）の例を再引用した。
- (2) 『大漢和辞典』に「大概」と同じ意味として「大槩」の項目が記されている。その意味は「あらまし。おほかた。ほとんど。大概に同じ。」（二六五―頁）。また『下学』「文明」『饅頭』『黒本』「書言」では「大概」ではなく「大槩」と表記されている。
- (3) 「天旨背き難し。仍て聊か愚慮を廻らし、大概を洩らし奏するのみ」『角川古語辞典』第四卷（一九六三）七頁

(4) 例(九)(一〇)はいずれも『時代別国語大辞典』「室町時代編」より取り出したものである。

(5) 『新全集』二六〇頁

(6) 山田美妙(一八八七)『武蔵野』上「此風の言葉は慶長頃の俗語に足利頃の俗語とを交ぜたものゆゑ、大概其時代には相応して居るだらう」(『日国』より)

(7) 「たいがい+a」類の中、名詞的用法は三四例、形容動詞的用法は一九例である。

(8) 陳述副詞と文末表現との共起関係においては、小林(一九七八・一九八〇)の分類基準を基にする。小林は「分類語彙表」の〈用の類〉と『国語動詞の一分類』にみられる四種の動詞、また「雑誌九十種の用語用字・第一分冊」の〈使用率順語彙表〉を基に一二〇の動詞を抽出した。この述語部分となる述部分の構造を渡辺の助動詞の二種三類、及び終助詞の分類に基づいて、次のように四つの段階に分けて考えている。

(I) 「比況、様子、希望、ている・てしまう」

(II) 「た(だ)、肯定、否定」

(III) 「疑問、意志、推量、断定」

(IV) 「感動、祈り、義某、勧誘、依頼、命令、念押し、問いかけ」

(い・じょうん 博士課程後期課程在學生)